

バルカン・ロマンス語と環アドリア海ロマンス語

—— ラテン語子音連続 CT に関して ——

Romanzo balcanico e romanzo circumadriatico —— Il gruppo CT ——

北 村 一 親

Kazuchika KITAMURA

0. 本稿は当学会での筆者の口頭発表を起稿したものであり、本研究は平成10(～12)年度文部省科学研究費補助金による「ロマンス諸言語における音形の伝播と拡散のメカニズムに関する総合的研究」の一環として成されたものである。発表当日には本編12頁、参考文献6頁、地図2葉を資料として配布したが、今回は紙幅の都合で資料は精選し、参考文献も斯界のスタンダード的なものは略記した。詳しくは下記の拙稿を参照されたい。ルーマニア語マケドニア方言(=Mac.)に関しては「18世紀のMoscopoleにおけるアルーマニア方言」(=[アル])『ロマンス研究』21, 15-24; ダルマティア語(=Dalm.)は「ダルマティア語におけるCTの発展について」(=[ダ])『アルテス・リベラレス』62(1998.6)1-17; イストロ・ロマンス語(=Istr R.)は「イストリア言語学」研究序説」(=[イ])『アルテス・リベラレス』63(1998.12)1-16; レト・ロマンス語(=Rat.)は「レト・ロマンス語におけるラテン語<Occlusiva velare sorda+Occlusiva dentale sorda>の変遷に関する言語地理学的試論」(=[レ])『人間行動に対する基礎的研究』(1999.5刊行予定)(1-32)を参照。イタリア語ヴェネト方言(=Ven.)に関しては“El cambio fonético del grupo latino /kt/ en los romances y el albanés,”(=Cambio)Nag. St. in Ilum. XX, 109-18に簡単な言及があるが、何れ改稿する。南イタリアのギリシャ語方言(Norrioitalicá 'Ελληνικά. =NIE)に関しては『ロマンス語学論集』I(盛岡, 1999.3)67-72参照。またルーマニア語(=Rum.)・アルバニア語中のラテン語要素(=Alb.)の音変化過程に関する論考を『岩手言語学研究会(=ILC)7周年記念論集』(1999.7刊行予定)に収録する予定である。前述の「スタンダード」としてのロマンス語学文献資料に関して筆者は2回の口頭発表, 「ロマンス語学の課題(前編)全ロマンス諸語の論考を終えて」(38. ILC, 1998.8.21); 「同(後編)人文学の終焉, 或いは過去との訣別」(39. ILC, 1998.9.28)および1編の小論, 「論浪漫語学」(=[颯]), 北村(編)『岩手大学人文社会科学部 比較言語学研究室論集』(=[颯]) (盛岡, 1998.6)67-71に纏めたが、何らかの機会に改めて議論したい。(本稿では参考文献一覧を取って設けず文献名等を略記したが、これらの体裁は筆者が人文学の頂点と考える19世紀末から20世紀前半にかけてのオーストリアやドイツ等のロマンス語文献学の学術雑誌に範を仰いだ。因に筆者は『ロマンス文献学基本文献目録』を編纂予定であり、そのごく一部分を北村(編)『言語の制御と統合に関する多角的視点からの研究』(盛岡, 1999.3)97-102に抄録した。)

1. 「バルカン・ロマンス語(=RB)」および「環アドリア海ロマンス語(=RCA)」という名称は、共に仮称で

あり、現段階では多分に地理的区分を基礎としている。ケルト語を地理的観点から島嶼ケルト語(*Inselkeltisch*)と大陸ケルト語(*Festländisch-Keltisch*)に分類するのと同じ方法である。(Thurneysen, *Hb. d. Alt-Ir.* I, 1. 吉岡治郎『ケルト研究』4, 6-8; 拙稿『ケルト語の特徴』『アルテス・リベラレス』50, 3-6参照。この方法への批判はJ. M. Jones, *Welsh Gram.* 3参照。) 本稿でもこれらの名称は更なる研究に移るための一時的かつ便宜的なものであることを強調しておきたい。RBとRCAの領域を併せると、Bartoliの“das Apennino-Balkanische”(Dalm. I, 297); Judの“apenninobalkanoromanisch”(“Zum Dalm.” Nachdr.: *Rom. Sprachgesch. u. Sprachgeogr.* 438)等に相当するが、筆者は更にIliescuの“rhéto-norico-roman”(A. XVIII. *CILPhR.* VII, 56)を加えた方が良いかもしれないと考えている。何れにせよ、本稿のRCAあるいは「環アドリア海ロマニア」という概念はHerman, *Fs. H. Meier*, 199-226の想定する“la latinité du littoral adriatique”やLausbergの“die interadriatische Romanität”(RF, LXI, 321)と重なり合う概念である。問題なのはDalm. の帰属で、これを独立させるVidos, *Handboek*, 259-60(“Dalmatoromaans”)のような場合を除けばKuhn, *Rom. Phil.* I, 142 et seqq. のように通例、RBに分類するが、(Monteverdi, *Manuale*, 80の名称は“il daco-illiro-romanzo”,) 筆者はDalm. をより西方のロマンス語に帰属させる可能性も模索しており(「ル」13-14)、本稿ではDalm. のRCAへの分類を試みる。(Tagliavini, *Orig.* 6, 355もDalm. がRBとイタロ・ロマンス語の懸け橋であると考えている。) 畢竟、筆者の今回の立場はBartoli, *Dalm.* に基本的に依拠しながらもMerlo, *RIL*, XLIII, 271-81の主張までをも包括するものである。

2. 本稿の目的はラテン語子音連続CTの変化を調べ、その変化形の類型地理論を展開することである。CTの変化形は、ロマンス諸語において特徴的であり、特にバルカン半島からイストリア半島にかけて分布する(あるいは、分布した)ロマンス語は唇音化と口蓋音化の分立が見られ、これに関して様々な議論が成されてきた。よってバルカン半島から環アドリア海における各ロマンス語とAlb. のCTの変化の様相を詳細に調べることにする。

2. 1. ルーマニア語ダキア方言(=Dac.)においてCTは後述する例外を除いてptとなる。

ășteptă<*ASTECTĀRE<*ADSPECTĀRE. DER484; EWRS150; Cihac, *DEDR. Élém. lat.* (=Cihac)19; Candréa-Ilecht, *Élém. lat. Cons.* (=C-H)88; REW3039; Densusianu, *Rom.* XXXIII, 274; RDW115a-b. /cuptór<*CŌCTŌRIUS. DER2691; EWRS452; C-H, 88; REW2019; REW. *Correct.* 16a; Densusianu, *Rom.* XXXIII, 277; RDW461b. /deșteptă<DISPECTĀRE. DER2902; EWRS528; RDW533b; REW2515. /drept<*DĒRECTUS. DER3058; EWRS550; Cihac, 82; C-H, 88; REW2648; REW. *Correct.* 18b; RDW573a-75a. /fapt<FACTUM. DER3269; EWRS579; C-H, 88; REW3135; RDW607b-08a. /făptură<FACTURA. DER3269; EWRS580; C-H, 88; REW3136; RDW608a-b./frupt<FRUCTUS. DER3501; EWRS660; C-H, 88; REW3537; RDW650b-51a. /îndreptă<*INDIRECTĀREまたはîn+drept. DER4938; Cihac, 82; C-H, 91; RDW802b. /lăpte<*LACTE. DER4707; EWRS939; Cihac, 138; C-H, 88; REW4817; REW. *Correct.*

26a; RDW888b-89a. /lăptúcă < LACTUCA. DER4709; EWRS941; C-H, 88; REW4833. /lúptă < LŪCTA. DER4949; EWR S1003; Cihac, 151; C-H, 88; REW5147; RDW934a. /noápte < NŌCTE. DER5704; EWRS1185; Cihac, 179; C-H, 88; RE W5973; RDW1059a-b. /opt < ŌCTO. DER5906; EWRS1222; Cihac, 186; C-H, 88; REW6035; RDW1059a-b. / piépt < PĒCTUS. DER6360; EWRS1310; Cihac, 204; C-H, 89; REW6335; RDW1158b-59a. /piéptene < PĒCTINE. DER6361; E WRS1312; Cihac, 204; C-H, 88; REW6328; RDW1159b. /treáptă < TRAIECTA (TRAIĒRE) または TREECTA (Densu- sianu, Rom. XXXIII, 273). DER8881; EWRS1756; C-H, 89; REW8842; RDW1640a. /vipt < VĪCTUS. DER9288; EWRS1 905; Cihac, 318; C-H, 89; REW9315; RDW1751b.

先行する唇音による異化のため例外になったと従来, 考えられているものに次のような語があるが, 実はこれらの語はCTに溯らない可能性が極めて高い。Poghirc, ARSR, *Ist. limb. rom.* II, 323はこの異化の代表例として boteza < BAPTIZĀRE を挙げており, 過去にも Graur & Rosetti, *BL*, III, 72; EWRS212; Cihac, 27; REW939等が同じ解釈をしている。しかし, Candréa-Hecht, *Rom.* XXXI, 303-04はロマニア中部より借用された *battizo から出た今日の方言に残っている bâteza に由来すると主張した。また DER6201では pãta の語源を一応 *PICTĀRE として語頭音との異化によって説明しているが, 同時に他の語源も紹介しており (σπίτeta. Alb. petë. *PITTA < 𐌱𐌿𐌿 (=Gr.) πίττα), REW6546では Gr. pítta (πίττα) を挙げている。PAC- TU に由来すると考えられていた pat は DER6200 で Gr. πάτος の干渉や PĀTUM, *PĀVĀTU, ハンガリー語 pad など に由来する可能性も示唆している。Dac. flutura を DER3438; REW3384; Rosetti, *Ist. limb. rom.* I, 175 では FLUCTULĀRE から出た語としたが, Candréa-Hecht, *Rom.* XXXI, 310-11; EWRS627 では *FLUTULUS に由来する とした。REW. *Correct.* 21a でも FLUCTULĀRE を語源とすることを疑問視している。Tiktin, *Rum. Elem.* 55 が「その起源が *ARRECTO, *VĪCTIMO だとしたら」という条件付きで示した arăt と vatăm も CT に溯る可能性は低く, 前者は DER369 では「語源不明」とし, 後に考えを放棄したようであるが, Candréa-Hecht, *Rom.* XXX I, 301-02; C-H, 89, 91 では *ARRĀTARE < *ADRĀTARE に起源を求めた。後者, vatăm の方は Körting, *LRW*³, 1016 ; Graur & Rosetti, *BL*, III, 72; Cihac, 307 において VĪCTIMO が提案されたが, Tiktin, *RDW*, 1718b で “Lat. vīctīmo, -āre (opfern) ist lautlich unmöglich” とし, C-H, 89, 91 では *VĀTĪNO を語源とした。Densu- sianu, *Rom.* XXXIII, 288 は VĪCTIMO, *VĀTĪNO の双方をも否定した。すなわち, これら例外とされてきた語は, 全て語源が CT に溯り得ないものであり, Dac. における CT > pt は先行母音や強勢の位置には関係ない ことが判明した。Dac. ft を有する語は Gr. 起源の借用語であり, Gr. から直接, あるいはラテン語やハン ガリー語を経由して入った語である。Kitamura & Kubo, “Magyar elemek az oláh nyelvben,” 『*雜*』78; Gáldi, *Mots d’orig. néo-gr.* 94; Tamás, *Etym. W. d. ungar. Elem. im Rum.* 421a-b 参照。ἐκτικὸς > hectica > heptică, heftică. (ὄχτικαὸς > óftică. Miklosich, *Sitz. d. kais. Akad.* CII, 65. κηχτή > piftie. Wit- toch, *CMF*, XXIX(2), 147.)

Dac. の下位方言の一つであるモルドヴァ(モルダヴィア)方言 “Лимба молдовеняскэ” においても CT > pt (пт) である。(опт, Атласул лингвистик молдовеняск. (=АЛМ) I, 81/пепт (к”епт, т”епт), АЛМ. I, 239/

куптор (купт' јор), АЛМ. I, 286/лапте, АЛМ. I, 287/воапте, АЛМ. I, 288.) купт' јорおよびк'епт, т'ептは非常に新しい変化としての口蓋音を有する語である。後者に関してはMac. Καβαλλιώτης, 1770(=Καβ.), κέπτου(t'eptu); Δανιήλ, 1802(=Δαν.), κέπτου-λου(t'eptu-lu), Miklosich, Rum. Untersuch. (=Mikl.) I, B, 19a; 67a参照。(Καβ. と Δαν. は後述) また, Miklosich, Sitz. d. kais. Akad. CII, 61-62も参照。

既に拙稿「ルーマニア語におけるラテン語CT /kt/」(1984)3-4;「ロマンス諸語及びアルバニア語におけるラテン語/kt/の音変化」(「マ」) (1985) 13-14; Cambio, 110にて指摘したことであるが, Coresi, Psaltirea slavo-româna (Braşov, 1577)において dereptulūとderetū (Niculescu&Dimitrescu, Testi rom. ant. 22. fol. 7r. 参照)が並立しており, Palia de Orăştie (1581-82)においても derept, Roques(éd.) I, XXVII, 3; 5 etc. とderetū, ibid. XXVII, 8が共存している。(Palia de Orăştieにおけるこの点に関してはRosetti, Ist. limb. rom. VI, 259にも言及あり。) Psaltirea slavo-românaのderetūに関してNiculescu&Dimitrescu, Testi rom. ant. 28. n. Aでdereptの誤りとしているが, 他の文献の例から判断して誤記とは考えられない。Psaltirea Hurmuzakiにderetū, deretată, Codicele Voroneţeanにderetatăが見られる。(Rosetti, Ist. limb. rom. VI, 259)これらのtを有する語がpt>tの縮約なのか, 借用なのか現段階では不明である。

ルーマニア語イストリア方言(Istr.)においてCTは次のようになる。

CT>pt. (a)şteptă<*ASTECTARE<*ADSPECTARE. Popovici, Dial. rom. (=Popov.) 1, 88b; şteptă. Mikl. I, A, 72a; aşteptó, Byhan, Jb. Inst. rum. Spr. VI (=Byhan), 189. / coptór<*CŌCTORIUS. Puşcariu, Stud. istr. (=SI) III, 307a; Popov. 1, 100a-b. Cf. coptorită. Mikl. I, A, 25; 71a; koptór. Byhan, 247. / lăpte<*LACTE. SI, III, 313a; Popov. 1, 119b; lapte. Mikl. I, A, 33; 62a; lópte. Byhan, 267. / nopte<NŌCTE. SI, III, 317b; Popov. 1, 129b; Mikl. I, A, 37; 72b; Byhan, 288/opt<ŌCTO. Popov. 1, 131b; Mikl. I, A, 37; Byhan, 293. Cf. osn "opt"<κoptήtosam (Rešetar, Elem. -Gram. d. kroat. (serb.) Spr. 89), SI, III, 318b; osem. Mikl. I, A, 37.

CT>t. dret<Ven. dretto. Popov. 1, 107b; drit, Mikl. I, A, 27; 58a; Byhan, 210. Cf. dreto, drito, Boerio, Diz. d. dial. venez. 247b-c. / latuke, laptuke "lăptucă". Listele lui Bartoli (SI, III, 119); lătuca. DER4709. <イタリア語(=It.) lattuga. Graur & Rosetti, BL, III, 72; Alb. Καβ. λατρούκα, cf. Mac. Καβ. λακρούκα, Mik. I, B, 22a.

ここでも本来的な変化はCT>ptであり, CT>tは借用語の有する音形であることが分かる。

A. Iveが"cimelj rumeni" (AGI, IX, 186-87)と称したダルマチア海岸北端のVeglia島(Krk島)のPoljizza(Poljica)とDobasnizza(Dubašnica)において19世紀まで話されていたRum. ("Krkumänisch")もIstr.の下位方言の一つである。(Veglia島のRum. に関してはDoria, LRL, III, 536a-b; Muljačić, ZB, XII, 51-55参照。Dalm. とIstr. との関係についてはPetrovici, Omagiu lui A. Rosetti, 689-92参照。) この方言でもCT>ptである。coptóru, opt, Ive, AGI, IX, 186; nopte, Muljačić, ZBalk, XII, 55. ここで興味深いのは数詞「9」がptを有する語形に変化していることである。nopt<NŌVEM, ("dévet(srb. id.)") "nove".

Ive, AGI, IX, 186; Byhan, 288, “eine Analogiebildungen zu *șopte, opt*”; *nóptele*. (Ive). Mikl. I, A, 3. Cf. *Dac. nouă*, RDW1062b-63a; *Mac. nouă, nqao, nao*, Capidan, Arom. (=Arom.) 402; ルーマニア語メグレン方言(=Megl.), *nqo*, Capidan, Meglenorom. (=Meglen.) 1, 155. 他のIstr. ではクロアチア語 *devet* (*Rešetar*, Elem.-Gram. d. kroat. (serb.) Spr. 89) に由来する *dévet* (Byhan, 207) であるが、この *nopt* は *sápte*, 「7」, *opt*, 「8」からの類推変化を被っている。Dalm. の項でも述べるが、同島のDalm. の数詞「8」は、「7」の類推によって *pt* を有する語形に変化しており、更にこのDalm. のインフォーマントの一人は数詞「9」までも類推によって *pt* を有する語形に変化させている。(「ガル」6-7参照。) Veglia 島でダルマティア語ヴェーリヤ方言と Istr. という二つの異なる言語が同一の類推変化を発展させたことは実に驚くべきことであり、言語接触の可能性も追究すべきであろう。

Mac. における CT を次に示す。

alúptu < LUCTŌ, LŪCTĀRE. Papahagi, DDA²(=DDA²)140; Arom. 325; REW5148. Cf. *lúptă* < LŪCTA. DDA²; REW5147. /*așteptăre* < *ASTECTĀRE < *ADSPECTĀRE. DDA²236; Papahagi, Ant. arom. (=Ant.) 16; REW3039. /*diștėptu* < DĪSPECTŌ, DĪSPECTĀRE. DDA²489; Ant. 19; RDW533b; REW2515; *adj.* Dalametra, DMR(=DMR)82b. /*drėptu* < *DERECTUS. DDA²501; Ant. 224; *dirėptu*, DDA²476; *ndrėptu*, DDA²868; REW2648. /*faptu* < FACTUM. DDA²539-40; Arom. 325; REW3135; *adj.* DMR89b; Ant. 274. /*kėptu, kept* < PECTUS. DDA²704; Arom. 83; *chėpt*, DMR50b; Ant. 160; REW6335. /*lápte* < *LACTE. DDA²724; Arom. 325; Ant. 109; *lăpti*, DMR118b; REW4817 / *lăptucă* < LACTUCA. Arom. 325; REW4833 / *noápte* < NŌCTE. DDA²903; *noăpti*, DMR150a; Ant. 229; REW5973 / *óptu* < ŌCTO. DDA²936; Arom. 402; DMR161a; REW6035.

なお *ndrėptu*, DDA²868; *ndrept*, Ant. 72 < *DERECTUS における語頭子音連続 *nd* は A1b. からの影響の結果であろう。

次に Mac. の古文獻, Καβ. (θ. 'Α. Καβαλλιώτης, Πρωτοχειρία (1770). Mik. I, B所収) (Καβ. の番号は G. Meyer, Alban. St. VI による) および Δαν. (Δανιήλ ό έκ Μοσχοπόλεως, Εισαγωγική διδασκαλία (1802). Mik. I, B所収) から得られた資料の一部を示す。

αλοϋπτου (*alúptu*), Καβ. 717; 「ΓΛ」22 / *κέπτου* (*t'ėptu*), Καβ. 936; 「ΓΛ」18; *κέπτου-λου* (*t'ėptu-lu*), Δαν. / *νοάπτε* (*noápte*) Καβ. 666; Δαν. / *ντιρέπτου* (*dirėptu*), Καβ. 333; *ντριάπτε* (*deriápte*), Καβ. 214; *ντριάπτε* (*driápta*), Δαν. / *όπτου* (*óptu*), Καβ. 686; Δαν.

Καβ. における *φροϋττου* (*frúttu*), Καβ. 380 は現代 Gr. を経て借用された It. 起源の語である。(*φροϋττου* < It. *frutto*, EWAS112; *φροϋτο* < It. *frutto*, ' Ανδριώτης, EAKN408a.) また *λιούφτε* (*l'úfte*), Καβ. 798; 「ΓΛ」22; *liúftă*, DMR126b は語形から判断すると A1b. からの借用語である。(*l'úfte*, EWAS250. *lufte*, FGJSSh101 6a-17a.)

これらの資料の Mac. も CT > pt であることが判る。

Megl. における CT を次に示す。 *chjept* < PECTUS. Meglen. III, 68b; REW6335 / *dirept* < *DERECTUS. Meglen.

I, 130; III, 111a; direp, *ibid.*; Wild, *Meglenorum Sprachatlas*. (=MRS. Cf. 「瀬」J71)515; REW2648. / ghipt < VICTUS. *Meglen.* I, 130; III, 139a; REW9315. / lapti < *LACTE. *Meglen.* I, 130; III, 165b; MRS330; REW4817. / noapti < NOCTE. *Meglen.* I, 130; III, 207b; nopti. *ibid.*; MRS523; REW5973. / uopt < OCTO. *Meglen.* I, 130; opt, III, 211b; REW6035.

上記のように Megl. では CT > pt となる。しかし、次のように CT > t となる語も少なからずある。

diret < *DERECTUS. C-II, 88; REW2648. / dištet < DISPECTO. C-II, 88; *Meglen.* III, 113a; REW2515. / fat < FACTUM. C-II, 88; REW3135. / štet < *ASTECTARE. C-II, 88; *Meglen.* III, 285b-86a; REW3039.

今までの他の方言の場合と異なり、一語一語の突発的变化や借用ではなく何らかの体系的な変化を CT > t で想定しなければならないのかもしれない。*Meglen.* I, 129-30 では CT の後にアクセント(強勢)が来た時の変化であると考えているが、上例のとおり全く意味をなさない。K. v. Ettmayer, *Prinzipienfragen d. rom. Sprachwiss.* I, 10 で Megl. fat と Dac. aștept との関係を Dalm. や Alb. における CT の変化形の多様性と関連づけているが、これも Dalm. や Alb. における CT の変化形の実相を考えたならば空論に帰すものである。むしろ筆者は Megl. の CT > t をマケドニア語(あるいは南西ブルガリア方言。Mladenov, *Gesch. d. bulg. Spr.*; Томев, *Макед. јазик*, I, 197-224. 参照。)との接触による変化ではないかと思う。ブルガリア語のラテン語借用語では CT > t である。(TECTUM > teto, Solta, *Einführung*, 158.) かつて筆者は「言語接触について」『名古屋大学人文科学研究』18, 47 で Megl. の動詞形におけるマケドニア語の強い影響を考察したが、CT > t もこの方向でいずれ検討してみたい。

2. 2. Alb. におけるラテン語借用語中の CT の変化は次のとおりである。

dëftoj, diftoj < *INDICTARE. Haarmann, *Lat. Lehnw. i. Alb.* (=LLA)130; dëftó j, dëfté j, G. Meyer, *Grundriss*, I (=Meyer), 818; dëftó j, dëfté j, Di Giovine, *Gruppo CT (=Gruppo)*, 16-24; Çabej, *Stud. etim.* I (=Çabej), 92; FGjSsh321a. Cf. REW4373. / ftua, ftue < C(O)TONEUM. EWAS113; LLA, 41; 120; Meyer, 818; ftua, ftóni, *Gruppo*, 42; FGjSsh513b-14a. / koftor, koftuer < *COCTORIUS. LLA, 68; 118; *Gruppo*, 54-55; FGjSsh839b. Cf. Rum. cuptor, DER2691; REW2019; Tagliavini, *CN*, I, 91; G. B. Pellegrini, *Studime filologjike*, XXXVI(3), 101. / lëftoj, luftoj < LOCTARE. l'uftón, EWAS250; luftó j, lëftó(n)j, *Gruppo*, 55-56; Huld, *Basic Alb. Etym.* (=Huld)86; < luftë, Çabej, 117; FGjSsh1017a-b. Cf. REW5148. / luftë < LOCTA, LLA, 92; l'uftë, EWAS250; l'uftë, Meyer, 818; luftë, *Gruppo*, 55-56; λιούφα, Καβ. 798; 「7M」22; FGjSsh1016a-b. Cf. Rum. luptă. DER4949; REW5147. / taftar < *TRAJECTORIUM. EWAS421; LLA, 101; *Gruppo*, 71-73. Cf. REW8844. / troftë < TROCTA. LLA, 47; < TROCTA ~ τρωκτες, EWAS437; troftë, Meyer, 818; *Gruppo*, 74-77; FGjSsh2028b. Cf. REW8942.

drejtë < *DERECTUS. EWAS74; LLA, 76; 82; 104; 122; *Gruppo*, 24-31; Huld, 55; dreit, Meyer, 818; dreit (Geg), Meyer, *Alb. Stud.* IV, 58; FGjSsh369b-70a. Cf. Rum. drept, DER3058; REW2648. / pajtoj < *PACTARE. LL

A, 73;79:91;104; "eine Mischbildung aus pajtój + pak'ój", Meyer, 818; Gruppo, 56-60; FGjSSh1329a-b. / trajtë<TRACTUS. LLA, 61;95; Gruppo, 73-74; FGjSSh2012a. / trajtoj<TRACTĀRE. LLA, 61;72;82; Meyer, 818; traitón, EWAS434; FGjSSh2012b.

dertón < *DIRECTARE < DIRECTUS. EWAS66; dertój, Schuchardt, KZ, XX, 261. Cf. REW2648. / fytyrë<FACTURA. LLA, 49;61;77;86;125; fytyrë, Gruppo, 45-49; "die Lautgestalt des alb. Wortes ist die italienische", EWAS116; fëture, füturë< It. fatura, Meyer, 818; fytyrë< ῥῥῥ~faturë< It. , Çabej, I 30; Thomai, Leksik. e gjuh. shqip. 194; FGjSSh526b-27a. / fërtere<FRICTĀRIUM. LLA, 99;127; fërtëre, fëltëre, Gruppo, 31-33. / fryt<FRĀCTU. EWAS112; LLA, 51;62;127; fryt, frujtó(n)j, Gruppo, 39-41; FGjS Sh508a. Cf. Rum. frupt, DER3501.

上記のとおり CT>ft, jt(it), tとなる。CT>tでは縮約が考えられるが、それがft>tなのかjt(it)>tなのか判断に窮する。ただし frytはF. Blanchum, Dict. Lat. -Epir. (1635)に "fruit, Lat. FRUCTNS[sic; i. e. FRUCTUS](Roques(éd.)28)"とあり, jt(it)>tであることが判る。(Schuchardt, KZ, XX, 259. また Meyer, 818でも fruitの語形を示している。) これらの変化形の違いを「唇母音」や「口蓋母音」等という先行母音の違いで説明する試みもあるが(Meyer-Lubke, Gram. I, 387; id. ZrP, XLV, 643; Graur&Rosetti, BL, III, 66-67; O. Nandris, Phon. hist. 261; Lausberg, Rom. Sprachwiss. II, 50), 上の語例を見てもこれは誤りである。Weigand, BA, III, 178でCT>ftが古く, CT>jt(it)が新しい変化であることを示し, 更にBarić, Go-dišnjak Balk. Inst. I, 10で前者はアルバニア人がバルカン半島内部にいた頃, 後者はアドリア海沿岸でローマ人と接触していた頃であるとした。(他にPetrovici, LR, IX(1), 79-83; Çabej, RLi, VII(1), 161-99参照。)更なる考察が必要であるが, 筆者はAlb.のCT>jt(it)がDalm.を経由したVen.形であろうと推定している。(「рр」22;25-27; Cambio, 110;112.)

実は上記の変化形の他にCT>qt, qがある。dreqtë, dreq< *DERECTUS. Gruppo, 24-31; Çabej, 83/duq< DUCTUM. LLA, 99. Di Giovineが "La questione dell'origine di(n)dërtoj e dreq rimane." (Gruppo, 31)としているようにこの変化形に関する説明は難しい。G. Meyerは dreit>dret'>drek'(=dreq)(EWAS74)とし, Ajeti, ZBalk, III, 3でもjt>qtを想定しているが, 筆者は南部トスク方言におけるqt>jt(Деч-ицкая, Алб. яз. 356-57;361;367)を重視してqtの方がより古いと考える。(1496年のArnold von Harffの語彙集(Roques, Anc. text. alb. #2)に既にdreq(Ressuli, Più ant. test. alb. 35)が認められる。)

2. 3. Dalm. と IstrR. の言語的比較についてはIneichen, Fs. Muljačić, 119の一覧表を参照。Dalm.の位置付けに関してはMuljačić, A. X. CILPhR, III, 1185-94; Rosetti, Fs. Wartburg z. 80. Geburtst. I, 71-74; Fisher, Lex. Affil. of Vegl. 13-26; 「Дл」; 「Дл」等も参照。ちなみに両言語領域の中間に位置するCres島とLošinj島のかつてのロマンス語はこの二言語の「橋渡し」をしたと言われている。(Colombis, A R, XXI, 243-67; Solta, Einführung, 153)

Dalm. のCTの資料は「ヲル」に網羅してあり、その全資料を冒頭で述べた学会における筆者の研究発表資料にも掲載した。要約するとDalm. のCT>ptは数詞vápto<ŌCTO, Dalm. II, 9に類するもののみで数詞「7」からの類推であり、この類推が数詞「9」にまで及ぶインフォーマントの記録もある。「ヲル」6-7。) CT>it [jt](fáit<FACTUS, Cubich, Ive, AGI, IX, II, c, 66. Udajna, Búrbur資料には無い。)は少数で, Ven. からの借用と推定される(後述)。Dalm. がCT>ptを自然の音変化であるかのように説く研究者もいるが(たとえばPušcariu, Etud. d. ling. roum. 30), これは前記のとおり類推による変化で, CT>t (aspetúr<*ASPECTARE, Dalm. II, 67)がDalm. 固有の変化形である。(詳細は「ヲル」6-13参照。)

IstrR. は言語的にDalm. とレト・ロマンス語フリウリ方言(=Friul.)との間に位置する。(Schuchardt (Deanović, Rad JAZU, CCCIII, 52所引); Skok, Sborník Haškovec, 313-14.) IstrR. ではCTはtとなる。(Deanović, Avviamento, 22.) Rovigno, fáto<FACTUM. ibid. /nuóto<NŌCTE. ibid. ;「イ」9.

2. 4. Rat. のCTに関しては「ト」にまとめたが、これはレト・ロマンス語グラウビュンデン方言(=Gr Bu.)45(+6)地点(括弧内は推移的言語の地点,あるいは死語化した地点), ドロミティ方言(=Dol.)29(+5)地点, Friul. 20(+3)地点, 拙稿「イタリア語ロンバルディア方言におけるラテン語CTの変遷」『名古屋大学人文科学研究』7, 53-64で調べたイタリア語ロンバルディア方言25地点, 加えてAIS(ed. ital. a cura di Sanga)より35(100番未満2, 200番台30, 300番台3)地点, 補遺的にIt. 各種方言辞典等から7地点の合計175地点(ただしTriesteはRat. 系(tergestino)とIt. 系(triestino)の二つを計上)におけるCTの分布を調べたものである。(Rat. の単一性や言語名称の問題に関しては「ト」(2-3)で簡略にまとめておいた。他にBattisti, Storia d. "quest. lad."; 富盛「言語」IX(2), 99a-100a参照。)GrBu. では多様な変化形が見られるのに対し, Dol. やFriul. では単一的にCT>tである。(よって「ト」では必然的にGrBu. とその周辺の言語との接触に重点が置かれた。)Meyer-Lübke, ZrP, XLV, 654-55では問題はあるとしながらも先行母音*ɛ, ɔ*の影響で脱口蓋音化(c>t)が生じたとした。しかしRat. においてitが見い出せない以上, cは想定できないのである。詳しくは「ト」(22-24)参照。

Ven. では従来, CT>tであると言われてきたが(D' Ovidio& Meyer[-Lübke], Grundriss, I, 556; Monaci, Crestom. ital. 622; Meyer-Lübke, ZrP, XLV, 652; G. B. Pellegrini, A. X. CILPhR, 333), 筆者が「マ」42-43; Cambio, 112;「ヲル」11-12で指摘したようにCT>itであろう。Giacomino da Verona, De Jerusalem celesti等の13世紀の古文獻に見られる it(noito, fruito, Mussafia, Monum. ant. d. dial. ital. 27; 72)がこれを物語っている。Atti dei Podestàdi Lido Maggiore(Lio Mazor)(1312-19)のpeito, U. Levi, Monum. d. dial. 3r, l. 12 (cf. Ascoli, AGI, I, 457; 465; 471, n. 1)も古いVen. のCT>itを示している。Tekavčić, Gram. stor. I, 178が示したCTの三つの可能性の中で2番目か3番目かは現段階では確定できないが, 1番目ではないことは確かである。Alb. およびDalm. の項でも述べたが, 筆者はVen. のitがDalm. を経てAlb. に入ったと想定する。古くからAlb. のitの問題が指摘されてきた。(Schuchardt, KZ, XX, 259; Ascoli, AGI,

I, 457) 今後, 筆者はVen. (この場合, 基本的にはVenezia方言。G. B. Pellegrini, Sag. s. lad. dolom. e s. friul. 410.), 特にアルバニアやダルマティアでの“veneto di là del mar”(Holthus&Kramer, Fs. Mulja Ćić, 43, n. 2), “veneziano <de là da mar>”(Folena, Cult. e ling. 227-67)の役割を追究していきたい。

2. 5. イタリア語中南部方言(=CM)ではCT>ttである。(D' Ovidio&Meyer[-Lübke], Grundriss, I, 550; Grandgent, From Lat. to Ital. 111; Wiese, Altital. Elementarb. 251; Meyer-Lübke(tr. di Bartoli& Braun), Gram. stor. d. ling. ital. 2103; Rohlf's, Hist. Gram. d. ital. Spr. I, 427; Tekavčić, Gram. stor. I, 176.)古文獻においてもttである。Toscana, otto, Monaci, Crestom. ital. 38; Umbria, dettu, ibid. 65; Campania, destuttu, ibid. 33; Calabria, dritto, ibid. 9; Sicilia, notti, ibid. 581.

南イタリアのCalabriaやTerra d' Otrantoの一部で現在も存続するGr. がある。(Κοντοσόπουλος, Διάλ. κ. ἰδιώμ. τ. νέας ἑλλην. 14-18; Rohlf's, Scavi ling. 217ff; Rohlf's(秋山訳), 『イタリア學會誌』25, 144-55; H. & R. Kahane, Gr. et Rom. I, 723ff; 泉井『ヨーロッパの言語』61-65.) Rohlf's, Hist. Gram. d. ital. Spr. I, 427, n. 2でkt>ftの変化が報告され, これを請けたRosettiはRum. やAlb. のCT>pt, ftとNIEを結び付けた。(Ist. limb. rom. II, 91f; Ling. 232.) しかし, これより先にMeyer-Lübke, ZrP, XLV, 644でNIEにおいてkt>χt>ft~ht>stという変化を考えており, Calabria(Καλαβρία)ではκτ>στとなるというΚοντοσόπουλοςの記述と一致する。(Διάλ. κ. ἰδιώμ. τ. νέας ἑλλην. 17)NIEのktの例としては, δάκτυλος>dáftilo(Terra d' Otranto); δástilo(Bova), Rohlf's, Etym. W. d. unterital. Gräzít. 492; Vocab. suppl. Tre Calab. I, 104a; Ἀνδριώτης, EAKN, 76aを挙げておくが, 詳しくは「ロマ」28-30; Cambio, 112参照。この変化でMac. stizme<κτίσμα(Miklosich, Sitz. d. kais. Akad. CII, 64)も説明できる。

3. 以上, 言語類型地理論的にRB・RCAに関わるロマンス諸語およびAlb.・現代Gr. というラテン語と深く関係する諸言語におけるラテン語子音連続CT[kt]の変化形を見て来た。ここで地理的位置関係をも考慮して整理すると次のようになる。

Ven. = j t	Friul. = t	Rum. = p t
	IstrR. = t	- - - - - ?
	Dalm. = t	Alb. = f t
CM = t t		NIE = f t / s t

確実なのはDalm.・IstrR.・Friul.が同じグループを形成することである。これらの言語を総括する名称を新たに考えたい。(K. Sandfeld-Jensenが曾て創設したBalkanfilologienに倣って筆者は「イストリア言語学」を打ち建てようと「Is」を著した。「イストリア言語学」はRCAとRBとの重なり合う領域を扱う分野であり、正にこれらの諸言語の縮図である。) Bartoli等のバルカン半島とイタリア半島のロマンス語を関係付ける学者がその重要な拠り所としたCTの変形であるが、Dalm.とCMとの関係は未だ十分に証明されたとは言い難い。今後tとttの関係を究明する必要がある。バルカン半島のRum.・Alb.は「唇音化」で統一でき、更にNIEも包括できそうであるが、もう一度、慎重に「唇音化」の過程を考える必要があろう。Ven.は筆者の想定のようにCT>itだとすれば、やはり西のロマンス語との接点を見出すべきであらう。筆者は『ロランの歌』サン・マルコ図書館写本225(ex fr. IV)の言語『名古屋大学言語学論集』5(1989)83-100および「文化接触における言語の諸相」『文化の基礎理論と諸相の研究』(盛岡, 1992, 123-36)にてフランコ・イタリアンに関する論述をしたが、今後この方面でも本稿の試みの一部が寄与できれば幸いである。

(付記) Dalm.最後の話者であるUdajna, Búrburの没年に関して今回の筆者の口頭発表でも触れたが、(詳細は「タル」;3-5)その後の情報をここに記しておく。Bartoliが最晩年に執筆したAlle porte orientali d'Italia(1945)17に“Il dalmatico è per gli studiosi delle lingue neolatine un linguaggio romanico[...], che si è spento a Veglia alla fine del secolo scorso, [...]”とある。これは彼が若い時に著したDalm. (1906)の記述と明らかに矛盾する。また、通説としてUdajna, Búrburが事故死したとされる1898年にイストリア半島の付け根にあるMuggiaでイストリア半島最後のFriul.の話者、Niccolò Bortoloniが死亡している。これはVidossich, Studi sul dialetto triestino, 1899-1901(rist. 1962)249, n. 7にあるが、Vidossichの情報源はBartoliの1899年の論文である。(ちなみに「Niccolò Bortoloni, detto karlín, 84歳」とCavalli, Reliquie ladine raccolte in Muggia d'Istria. (1893)6にある。)情報の何らかの錯綜があったのかもしれない。

(平成10年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究/課題番号10610507)